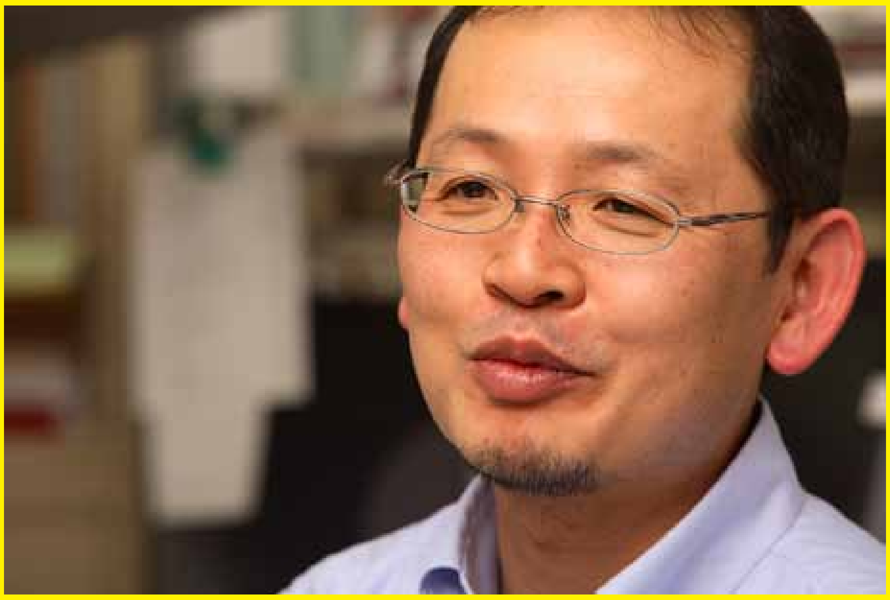
平安デジャブ

――抱擁国家、日本の未来

前野隆司＝文



前野隆司 MAENO, Takashi

1962年、山口県生まれ。民間企業キヤノンの技術者として実績を上げたのち、アカデミズムの世界に転身したという、異色のキャリアを持つ研究者。その活動は多様で、触覚についてユニークな研究を行ない、また工学の知見から人間の脳モデル「受動意識仮説」を発表。現在は文理融合領域、慶應大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授としてヒューマンマシンインタフェース、ロボットから、心の哲学、倫理学、教育学、組織・地域活性化、幸福学まで、あらゆるシステムのデザインとマネジメントに興味を持つ。『脳はなぜ「心」を作ったのか―「私」の謎を解く受動意識仮説』(筑摩書房、2004年)、『錯覚する脳―「おいしい」も「痛い」も幻想だった』(筑摩書房、2007年)、『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか?―ロボティクス研究者が見た脳と心の思想史』(技術評論社、2007年)、『記憶―脳は「忘れる」ほど幸福になれる!』(ビジネス社、2009年)、『思考の整理術―問題解決のための忘却メソッド』(朝日新聞出版、2009年)、『思考脳力のつくり方―仕事と人生を革新する四つの思考法』(角川ワンテーマ21、2010年)など、活発に著作も発表している。

青い目の少女との出会い

年年歳歳、花相似たり。歳歳年年、人同じからず。

何度年を重ねても、花はどれも似たようなものだ。人も、毎年、生まれては死んでゆく。しかし、一人として同じではない。

時の経つのは早いもんだね。

あれは今から十六年前のことだった。まだ幼かった飴居利香が、栗色の髪をなびかせ、黒い三輪車に乗って、私のところにやってきたのは。

利香は、まだあどけない七歳の少女だった。彼女が私の人生をこんなにも変えるとは、あの時は、思いもよらなかったもんだよ。

「おじいさん、ドアを開けて。」

まだ幼い利香が我が家のドアをたたいたのは、六月のある日のことだった。

「おじいさんってほどの歳じゃねえんだよ。」

ぼそぼそと独り言を言いながら、私は、古く重いドアを開けた。まぶしい光の中、初めて目にした利香は、小娘のくせに、見たこともないくらい自信にあふれた美しい少女だったよ。ひと目で日本人ではないとわかる、目鼻立ちの整った娘だった。

AIR

今思えば、彼女はアメリカ人だったんだね。実は、アメリカの少女を見たのは、あのときがはじめてだった。長いまつげの下の大きな透き通った青い目を見つめると、どこまでも吸い込まれそうだった。

年甲斐もなく、どきどきしたよ。

しかし、私は、頑として追い返したものだ。「私はだれにも会わない」と。

それまで私は、長い間、部屋に閉じこもっていたんだよ。驚くなかれ、二十年以上もの間。外との交渉を絶って、自分のことばかり考えていたんだ。いや、別に病気だったわけではない。疲れていたわけでもない。外の人たちと会う必要がないと思っていただけなんだがね。引きこもりというのはそういうものだよ。私は幸せだったんだ。私はあなただ。決して暗く陰湿だったわけではない。

今の若い者から見たら古臭いと言われるだろうが、趣味は、浮世絵や、お茶や、陶芸。ささやかな古典文化を一人楽しんでいたものさ。鎮まり返った心でね。当時の私は、たとえて言えば、隠居した武士のようだった。貧しくてもいい。気品を保って、静かに暮らしていければ、それでいい。ほかに何もいらない。そう思っていた。

しかし、利香と会ってから、私の人生は大きく変わったよ。いや、今となっては、本質的には何も変わっていないようにも思うんだが。

利香とのめまぐるしいほどの思い出には、いいことも、悪いこともあった。私は生まれ変わったと言ってもいいほどだ。

今日はその、私のほろ苦い思い出話をしようと思う。

東洋思想への傾倒の時代

あのとき、七歳の利香は何度もドアをノックして言ったものだ。「外に出て来て」と。最初は、どうして彼女が私のところに来たのかわからなかった。幼い娘の気まぐれだろうか。いや、古いながらも清楚な私の屋敷に興味を持ったんだろうか。私の家にあった、浮世絵や、陶器や、金銀銅でできた金属細工のうわさを聞きつけてやってきたのだろうか。

当時、私はその価値を気にかけていなかったんだが、今思えば、私が収集していた美術品、骨董品は、かなりの数があったからね。利香は、したたかに、私の価値を値踏みしていたんだ。

私はかたくなに外に出るのを拒んだものだ。私は今のままがいいんだ。今の生活に満

足しているんだから、干渉しないでくれ、と。それで、その日の利香は帰った。
しかし、利香は数ヵ月後にまたやってきた。そして、意志の強そうな、睨みつけるような目で、再び、「外に出てきて」と言った。私は根負けし、ついに引きこもりをやめることになった。
私が引きこもりをやめた理由を話そう。
引きこもりとは言っても、私は、私の家の隣にあった大きな屋敷の住人、清さんとは細々とお付き合いをしていたんだ。清さんの援助のおかげで暮らしていけていたといってもいい。清さんは、私よりも先輩。いろいろなことを教えて頂いた恩師だ。中国生まれのかっぷくのいい中国人で、漢詩から、孔子や老子、仏教の無の心のことまで、いろいろと教えてもらったものだ。博学だったなあ。私は、引きこもっていた間、清さんを通して世界と接していたと言っても過言ではない。清さんは、根っからの商売人だった。服飾産業とか、金属加工業とか、銀行を経営していて、二十年くらい前までは有名な大富豪だったそうだ。昔は儲かった、というのが清さんの自慢だった。

万物は流転する

ところが、時代は移り変わるもんだ。驚いたことが起こっていた。清さんの家の繁栄は、利香のお父さん——英男さんといったかな——に取って代わられていたんだ。栄枯盛衰だね。英男さんは、製造業の起業で大成功して財閥を率いているそうだ。

彼は、清さんに代わり、大富豪になっていたんだ。私が引きこもっている間にね。

幼い利香はまだ富豪ではなかったが、驚くなかれ、今から十年前には、親を抜いて、世界一の富豪になったんだよ。たいしたもんだ。

そして、清さんの繁栄は見る影もなくなった。築いたものを失うのは早い。没落した清さんは、屋敷の一部さえも英男さんに買収されてしまったんだ。

清さんは、負けん気の強い人だった。貧しくなったあとも、真っ赤な顔をして、必ずまた皆を見返してやる、と悔しがっていたものだ。誰の目にもそれはもはや困難に思えたがね。

うかうかしていると、私の屋敷も利香の親子に占領されてしまうんじゃないか。引きこもってばかりいないで、人と張り合って生きていかなければ、この身が危ういんじゃないか。私は、そう思った。

それで、私は、重い腰を上げて外に出ることにしたんだ。いざとなれば、力は出てくるもんだね。私は、静かな隠居生活をやめて、若いもんとやり合おうと決意したんだ。
そして、私は、久しぶりに外の空気を吸った。
外界は、まぶしかった。私が引きこもっている間に、世の中は大きく変わっていた。
それから七年間、英男さんや利香からは色々なことを学んだよ。彼らは、私の考えは古いからと、新しいことをいろいろと教えてくれた。論理とか、科学とか、自由とか、資本主義とか。西洋流の学問をね。文明開化だね。それから、西洋流の武道。引きこもっていたころの青白さが嘘のように、私は強くなった。

転機

転機だったのは、七年前の利香との争い。大人げないと言われるだろうが、私は利香と徹底的にやり合ったんだ。そして、こてんぱんに、負けた。
当時、利香は十六歳になっていた。もはや、少女ではない。白い肌がはちきれんばかりの魅力的な女性だった。あの若さで世界一の富豪だというんだから、ものすごいやり

手だ。ものごとを瞬時に判断する力があって、正義感が強く、何でも白黒つけたがる気の強い娘になっていたもんだよ。

しかし、歳は私の方がずっと上。小娘との喧嘩で負けるわけがないと思っていたものだ。

で、半年の間、私たちは争った。

争いの原因？　領土問題とでもいおうかね。英男さんや、利香や、その仲間が、私の古くからの友達のところにもやって来て、経済力と暴力で、私たちのなわばりに深く入り込んできたのさ。私は、友達を失うより、友達を従えて（侵略し服従させて）対抗しようとした。で、見せしめのつもりで、私は彼女に威嚇攻撃をした。それが彼女を怒らせたんだね。強い彼女に手を出した者は、それまで一人もいなかったんだから。

実を言うと、私は腕っ節には自信があってね。それまで、喧嘩で負けたことがなかったんだ。いや、私は基本的には孤立主義者だったから、そんなに何度も喧嘩をしたわけではないがね。正確に言うと、小さな喧嘩で負けたことはあったが、攻め込まれて身の危険を感じたことはなかった。だから、理由もなく、誰にも負けない自信があった。神様が私の味方をしてくれる、くらいに強気で楽観的だったね。

しかし、完敗だったよ。利香たちは若くて、新しい喧嘩のやり方を知っていたからね。

私は、これまでの人生でかつてないほどにぼろぼろになったんだ。悔しいも何もない。呆然だ。無条件降伏だ。もう、利香の子分になってもいい、殺されたっていい、という状態だったね。実際、もう死のうと思ったほどだ。死を生き生きと意識したのは、生まれて初めてのことだったよ。

一度きりの抱擁

しかし、争いが終わった後の利香は、一転して優しかったね。私は、負けイコール死だと思っていた。しかし、彼女の考え方は違ったんだ。争いが終わった後は仲間だという。

実を言うと私は観念し、切腹しようとまで思いつめていたんだが、私の屋敷は彼女に占領されていて、私はいつも見張られていたから、なにもできなかったんだ。

ある日、私が呆然と落ち込んでいると、彼女は突然私を抱きしめて、言った。

「もう、大丈夫。」

彼女の愛に包み込まれた瞬間だった。あのときの利香の圧倒的な包容力を、今でも鮮

明に思い出せる。
耳元で聞こえた、ゆっくりと落ち着いた息遣い。暖かく柔らかい胸のふくらみ。そして香水のにおい。利香のにおい。母に抱かれた子供のような安らぎだった。
私は泣いた。涙が止まらなかった。そして、私は、死ぬのを踏みとどまったんだ。
利香は、古いやり方を捨て、新しい生き方をするのなら、これからは仲間だ、と言ってくれた。私を守るとさえ言ってくれた。
彼女にしてみれば、あれは、私の古さを捨てさせるための戦いだったんだな。彼女はウインクして言った。「これからは私の時代よ」と。
そして、私は、利香に恋をした。
老人が、十六歳の少女に恋をするなんて、非常識だと言われるかもしれない。しかし、年齢は関係ない。
価値観も生まれも育ちも違い、年齢も離れた私が利香に恋をしたのは、今思えば、アンバランスだったのかもしれない。しかし、恋は盲目。
私は、これまでの私の価値観をすべて捨て、清さんへの恩も捨てて、彼女のいいなりになったものだ。笑いたい者は、笑えばいい。本気だった。私は、利香に好かれたい一心で、彼女のやり方を何でも受け入れたよ。

それから、私は、利香のような若さを身につけようと思って、一念発起、頑張ったものだ。懐古趣味は捨て、生まれ変わろうとした。脱亜入欧という言葉があるが、まさにあれだよ。私は、利香のことを本気でパートナーだと思っていたものだ。彼女から見たら、私は多くの友人の中の一人に過ぎなかったんだがね。
その後の私はといえば、がむしゃらに頑張ったよ。四年前には、世界第二の富豪にまで駆け上った。当時はエコノミックアニマルと言われたものだ。二年前には、バブルといわれた。その後は、バブルがはじけて、今は、借金地獄に陥ってしまったけどね。

私は国家

いまや、利香はもうすぐ二十三歳。世界は自分のものだと言わんばかりの元気に満ちている。最近はちょっと自信を失いかけている面もあるけどね。とはいえ、まだまだ若い利香は、私のような老人から見ると、うらやましいね。私は、百七十歳。
え？　そんなに長生きできるのかって？　人間じゃないからね。私は、国家。遅ればせながら、自己紹介をしよう。もうお気づきだろう。私の名は、日本。

飴居利香の本名は、ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカという。若いだけあって、しゃれた名前だね。

利香は本当は、二百二十七歳。え？　二十三歳じゃないのかって？　ああ、人間にたとえるために、実際の歳の十分の一にサバを読んでいたんだよ。

隣の屋敷の清さんの本名は、中華人民共和国。百六十年前には清（しん）と名乗っていたので、清さん。年齢は、四千歳。

私は、大和朝廷の頃から数えて、千七百歳。

そして、私の引きこもりは鎖国のこと。黒い三輪車は黒船。利香たちと争ったのは、もちろん、第二次世界大戦。

ここからはまたサバを読んで、十分の一の年齢で話をしよう。そのほうが、人間にとっては実感しやすいだろうからね。名前は本名に、比喩は事実に戻そうか。

大国の攻防

最近になって、私はつくづく思うんだよ。やっぱり、年齢も育ちも違うアメリカ（利

香）に恋をしたのは間違いだったんじゃないかってね。
いや、もちろん、今の時代、アメリカとうまくやっていかなければやっていけないのは確かだ。アメリカに教えてもらった自由主義や民主主義。そして、日米安全保障条約。これらがあったから、私は効率的な国家になり、軍事支出や人的コストをかなり抑えられた。アメリカのおかげで、私は経済成長に専念し、アメリカに次いで世界第二位のGDPを維持してこれたんだ。
しかし、今年、中国（清さん）のGDPが、二十年ぶりに私を再び追い抜くんだよ。それに、これから二年（実際は二十年）以内に、アメリカのことも抜き返すといわれている。もともと何百年も世界一の富豪だった中国が、産業革命で勢いをつけたイギリス（英男さん）や、その娘のアメリカに負けていたのは、ほんの二十年間のことだ。長い人生から見ると、つかの間のことだったね。昔の秩序に戻るのかなあ、とつくづく思うね。
この地球上で最も長老といわれているのは、中国と、インド。エーゲ文明から数えると、ヨーロッパもそうだね。みなさんざっと四百歳から五百歳といわれている。あまりに長生きなので、正確な年齢は今となってはよくわからないのだけれど。
インドも、ここ二十年くらいは低迷したけれども、二年後にはGDP世界第二位にな

るだろう。四年後には、中国とインドのＧＤＰの合計が、世界全体の四十五パーセントにもなるそうだ。これは別に驚くほどのことではない。ほんの三十年前も、そうだったのだから。

私のＧＤＰの順位が下がるのを見て、日本の地盤沈下、と言う人がいるが、そんなことを言う人は、視野が狭いんじゃないかと思うよ。私の人口は、世界人口の二パーセント。そんな国のＧＤＰが世界の八パーセントを占めていることの方が、歴史のいたずらなんだよ。

私はもともと平和主義者でね。平等で平和な世界がいい。私は、自分の発展のことばかり考える若い国家とは違って、世界の発展のために尽くす長老でありたいね。こんな私の気持ちを、みんなにもわかってほしいんだ。

人間という小さな存在

私たち国家から見ると、残念ながら、人間の一生は虫けらのように短い。わずか十年弱だ。小さな人間がそのものさしで世界を見てしまうのは致し方ないとはいえ、なんと

まあ、いつも小さなことで騒いでいることか。

先ほども述べたように、私のＧＤＰが世界第二位になったのは、今からわずか四年前のことだ。バブルといわれたのが、二年前。バブル後の低迷は、わずか一年。百七十年の私の生涯から見ると、とても短い間の出来事なんだよ。

なのに、わずか数年前には大金持ちだとお祭り騒ぎしていた人間が、今では閉塞感だ、衰退だと騒いでいるんだから、なんとまあ、了見の狭いことか。

もうすこし、落ち着いて、大国の盛衰のレベル、数百年の単位で、ものごとを見てもらえないものだろうか。

まあ、人間ばかりを責めるのは独善的だろう。私自身も、自分のこれまでの長い人生のことをまるで記憶喪失のように忘れ、若いアメリカに恋をしていたんだからね。お恥ずかしい限りだ。

しかし、最近は、歳のせいか、昔の事をよく思い出すんだよ。今は、あのころに似ているなあ、と。平安時代に。

世界一サステナブルな国家、日本

皆さんは、日本語の文章を読んでくれているところを見ると、私の中の小びとかな。人間の脳のニューラルネットワークを小びとにたとえ、人間の心は無意識下のたくさんの小びとの役割分担の結果として生じていると言った人がいた。

「脳」と「小びと」の関係は、「国家」と「国民」の関係と同じだね。人々は思い思いに生きているようだけれど、国家というレベルで見ると、国家の意思を作り出している部品だともいえる。

そういう意味では、皆さんは私の一部だね。私自身だ。

私は元来謙虚な性格だから、自慢するのは気恥ずかしいんだが、自分の一部に言い聞かすぶんには、自慢をしたって誰にも迷惑をかけないだろう。だから、すこし私の自慢話を聞いてもらえないだろうか。

中国やインドやヨーロッパは私よりも長生きだといったが、彼らはいわば、何度も総入れ替えをしている。人間で言うと、手足を作り替えたり、内臓や脳を入れ替えたりして生き永らえているサイボーグだ。ずっと生きているとはいえ、実は、身体のすべてが、生まれたときとは入れ替わっている。

中国は、殷、周、春秋戦国、秦、漢、三国、晋、南北朝、隋、唐、五代、宋、元、明、清、中華民国、そして中華人民共和国と、さまざまに支配者を変えて、四百年間生きてきたに過ぎない。

インドもそうだ。初期には民族が入れ替わったし、一時はイギリスに支配されていたこともある。

ヨーロッパにいたっては、昔、ローマ帝国として南部が統一されていたこともあるが、長い間、分裂状態を続けた後、欧州連合として政治的に統一されたのはほんの二年前のことだ。

つまり、民族的・政治的に入れ替わらずに長生きした国家は、ほとんどない。

それに対し、皆さんもお気づきのように、私は百七十年間、一貫して、ひとつの国だったという自負がある。ご存じのように、政治形態は変わったとはいえ、天皇家はずっと続いていて変わらない。まあ、一瞬、つまり、百七十年のうち、〇・六年間、アメリカに占領されたことはあったけどね。まあ、これは誤差みたいなものだ。そういう意味では、私は、一貫した国家として、世界最長老だと自負している。他にこんな国はない。孤高の国だよ。私は、「世界一、サステナブル（持続可能）な国家」なんだよ。

私自身、ここ数年間、このことをすっかり忘れていたことを反省しているんだ。もち

ろん、私の脳の小びとである、国民の皆さんも、忘れていたことだろう。
みんな、ぜひ思い返してみてほしい。皆さんは、世界一、サステナブルなやり方を知っている国の国民なんだよ。近視眼的にならないでほしい。長い目で見たときに、どこの国がいちばん、生き延びるための正しいやり方をわかっているのかを、私の一部である皆さんに、はっきりと自覚してほしいんだよ。
いや、まあ、パラドックスみたいなもので、『「自分たちのすごさを自覚していない」ことが、日本人のすごさの秘訣』なんだけどね。
だから、私も少し躊躇しているんだ。魔法の秘密は教えないほうがいいのかもしれない。秘密を知ってしまった瞬間に、魔法は解けてしまうのかもしれないからね。
でも、話そう。国民が、不必要な閉塞感や無力感、敗北感にさいなまされているのは、痛々しくて見てはいられないから。
秘訣は、思想的雑居性、無自覚的融合性、無限抱擁性
私は、なぜ、世界一サステナブルな国家であり続けてきたのか。
その秘訣は、皆さんの「思想的雑居性」「無自覚的融合性」「無限抱擁性」だ。これらに尽きる。これらが、私たちの、他の国にはない優れた特徴なんだよ。
「思想的雑居性」と「無限抱擁性」は、今から五年前に出版された「日本の思想」(岩

波新書、一九六一年）で丸山眞男さんが使った言葉だ。

実は、彼は、必ずしも肯定的な意味でこれらの表現を使ったわけではなかったんだが、私は楽観主義者なんでね。応援の言葉と受け止めているんだよ。それから、丸山さんは、神道の説明の中で「思想的雑居性」と「無限抱擁性」にふれたんだが、宗教に限らず、私の文化全般についても同じ考え方を拡張できると思う。そこで、ここではこれらの言葉を使って説明しよう。

まず、日本人の「思想的雑居性」とは何か。

読んで字のごとく、思想が雑居していても気にしない、ということだ。

よく言われることだが、日本人は、正月には神道、クリスマスにはキリスト教、葬式は仏教、というように宗教の境界があいまいだ。このことは、欧米のものさしで見ると奇異に映るといわれる。

もっといえば、現代人は、仏教と神道は別物だと思うかもしれないが、これは、ほんの十四年前の明治維新以来のことだ。それまで、仏教が伝来してから百年以上の間、仏教と神道はずっと融合していた。神仏習合だ。神社と寺院は同じ敷地に交じり合っていて、庶民は神と仏を別の宗教と意識する必がなかった。これに対し、明治政府が、天皇を神格化した新しい神道を作るために、徹底的な神仏分離を行った。敷地も人も明確に

分けた。その影響が現代に残っているから、現代人はずっとそうだったかのように錯覚しがちなだけだ。

あらゆる思想が雑居する

思想的雑居性は神仏に限らない。

戦後はアメリカ型の資本主義を導入したにもかかわらず、世界で最も成功した社会主義社会と揶揄されるように、個人ではなく組織や社会を重視する考え方が日本人の根底にある。革命で自由を勝ち取ってきた諸外国の国民と違って、日本国民の政治的なスタンスはあいまいなままだ。日本の政党は、イデオロギーを基軸につくられていないから、資本家対労働者、小さな政府対大きな政府、軍拡対軍縮のような議論にはなかなかならない。このように、イデオロギーは雑居している。

医学部では西洋医学を学ぶが、民間には漢方医や整体が普通に共存している。スピリチュアルブーム、といって、非科学的な死後の世界を容易に受け入れる人も少なくない。なんの思想的根拠もないのに、多くの人に、子供の名前の画数とか、風水とか、星座占

いが受け入れられている。このように、科学、宗教、迷信も雑居する。

日本人は、これらの思想的雑居が普通だと思っているかもしれないが、少なくともアメリカではそのようには考えない。ある宗教を信じるか否かはゼロか一かだし、自分はどのイデオロギーに立脚するか、どのような医学を受け入れるか、どんな思想を信じるかは、明確だ。真か偽か、ゼロか一か、考えが明確であることが、知的であることだと考えられる。逆に、そうでないあり方は劣っていると考える。一神教を高等宗教と呼び、神道のような自然崇拝的なあり方を原始宗教と呼ぶのも彼らの優越感の表れだろう。

それを真に受けて、思想的雑居性は日本の欠点だ、と考える日本人もいる。若いアメリカにならって、思想を明確化すべきだ、と。私も一時はそう信じた。しかし、そうだろうか。世の中は複雑で、本来はアナログだし、多様な考えがある。光は粒子なのか波動なのかを決められないのと同様、人間はいい人と悪い人に分けられるものではない。

それぞれの立場には、それぞれの正論がある。若者向けのドラマや漫画では、いい人と悪い人をはっきり分けるが、世の中そんなに簡単じゃない。白黒つけたがる、若いアメリカの考えを、今の日本人は、受け入れすぎなんじゃないだろうか。

それから、思想的雑居性は日本の特殊な特徴だ、と言う人がいる。しかし、そうでもない。インドのヒンドゥー教は、仏教もその一部だと考えるほどに多様で雑居的だし、

中国の政治と経済は、「資本主義に共産主義が打ち勝つための第一歩として資本主義経済を導入する」という雑居的建前になっており、さらに、非公式にはそれ以外の立場の中国人も増えている。つまり、古来、東洋では、思想的雑居性は特殊なことではなく、むしろ一般的だったというべきだろう。しかも、それは、思想として劣っていたわけではない。むしろ長い時間の試練を越えた経験に基づく知恵だ。ただ、効率重視の近代的合理主義とは相容れないだけだ。

産業革命以来、ほんの二十年間、ゼロか一か、自分か他者か、中か外か、原因か結果か、白黒をはっきりさせて雑居は許さないという西洋近代的考え方が世界を席巻したに過ぎない。現代日本人は、そのような西洋近代の、論理・科学重視の教育を受けているから、あたかもそれが自明のことであるかのように勘違いしがちであるにすぎない。

よろしいだろうか。善悪、白黒、自他、内外を分ける考え方は、デカルト、カント、ニュートンの生きた近代以来、ほんの二十年間の流行りにすぎない。その前は、何百年間も、そうではなかったんだ。

何百年間も曖昧な思想的雑居時代が続いていたのを修正した、合理的な西洋の近代こそが正しいのではないか、と反論される方もおられるかもしれない。そうではない。西洋自身も近代の考え方は間違いだったと認めたのが、現代という時代だ。ニュートンの

運動方程式は厳密には正しくなかったし、デカルトが言った「我思うゆえに我あり」も間違いだった（我は幻想だった）。カントが信じた絶対的な善も存在しないことが明らかになった。

ポストモダンの哲学者リオタールの言葉を借りれば、現代は、大きな物語（本質的な真や善）が失われ、一人ひとりが小さな物語を紡いでいかざるを得ない世界だ。普遍的なものはないと知りながら、普遍的なものを探すという矛盾を生きなければならないのが現代人なのだ。合理的な全体最適解など見つからないことが自明なのに、懸命に、よりよい世界を探していかざるを得ないのが、現代という時代なのだ。

そして、私たち日本は元来それを超越している。だから、いくら西洋流の近代合理思想が輸入されても、それらを雑居させるだけで、帰依はしない。つまり、「雑居を否定する思想」としては用いない。

だから、「思想的雑居」というユニークなあり方は、「思想的純粋」よりもサステナブルなのだ。

無自覚的融合性

さて、日本がサステナブルな理由の続きを話そう。日本の第二の特徴は、日本人が思想的雑居性に対して「無自覚」である点だ。

いや、どんな文化も、その特殊性について無自覚なんだけどね。一度外に出て、外の世界にどっぷりとつかってみないと、外と比べて自分のどこがどのように特殊なのか、自覚することはできない。

アメリカだってそうだ。自分たちが若く未熟な国だということを知らないばかりか、自分たちが世界だと思っている。プロ野球のワールドシリーズがいい例だ。国内のア・リーグとナ・リーグの決戦を世界決戦だと呼ぶのだから、なんとまあ、勝手なものだ。

中国も、フランスも、ある意味で、アメリカに似ているね。自分が世界の中心だと思っている。大国主義といおうか。まあ、単純で、わかりやすいのだが。

一方、日本人は、この極東の島国が、特殊な異端だと思っているふしがある。よく日本人は、「外国では○○だ」などと言う。日本対外国、という、一対多の図式だ。しかし、日本のどんなところが、他のすべてを敵に回すほどにユニークなのか、わかって言っているだろうか。もちろん、海外に行く日本人は増えたので、日本とはどんな国かを理解

する人は増えつつあるのかもしれない。現在、百万人以上の人が海外に在留しているという。それでも、全日本人の一パーセントほどだがね。

さて、無自覚的融合性の話に戻ろう。

自覚とは、「意識」という中心を持つこと。一方、無自覚とは、「無意識」。「意識」という中心を持たないこと。だから、日本は、雑居した様々なものごとの可否を「意識」することなく、それらを融合することができる。

例えば、日本では、小学校以来、近代西洋型のやりかたで、算数や理科を学ぶ。これは、明治維新や敗戦のあとで、西洋から導入したやり方だ。

一方、国語や道徳や総合的学習の時間では、諸行無常、万物流転、親孝行、目上の人を敬う、といった、もっと昔から当然とされてきた考え方を教育している。ふつう、日本人は自覚していないが、これらは、仏教、神道、儒教の影響を強く受けた考え方だ。

つまり、日本では、最近導入した西洋的なやり方と、古くからの東洋的なやり方を、無自覚のうちに融合させている。しかも、面白いことに、融合の結果、新たにまた日本的なものを生み出している。

平安時代と近未来

そうそう、現代は平安時代に似ている、という話をまだしていなかったね。

漢字が輸入されてから、ひらがなができるまでの歴史を考えてみよう。漢字が中国から輸入されたのは、五世紀から六世紀。仏教や様々な技術も一緒に輸入された。いわゆる古墳時代から飛鳥時代のことだ。それまで、日本には文字はなかった。万葉集が編纂されたのは、七世紀から八世紀。そこで創造されたのが、万葉仮名。漢字の本来の意味を無視し、漢字の音を使って日本語を表すために使われた文字だ。

たとえば、奈良時代に編纂された万葉集の「我が背子が　帰り来まさむ　時のため命残さむ　忘れたまふな」（作者：狭野弟上娘子）という句。実際には、万葉仮名で、

和我世故我　可反里吉麻佐武　等伎能多米　伊能知能己佐牟　和須礼多麻布奈

と書かれている。

万葉仮名をくずして作られたのがひらがな。ひらがなが最初に公的文書に現れるのは、十世紀初めの古今和歌集だ。平安時代は八世紀から十二世紀まで続いていたから、ひら

がなが広く使われるようになったのは平安時代の真っただ中ということになる。
そして、平安時代とは、日本独自の文化が花開き、歴史上最も長い間、都が一ヵ所（京都）にあった時代だ。江戸時代から現代までを東京の時代と捉えるなら、今の方が少しだけ長いともいえるが。
つまり、漢字や中国の文化を輸入してから、ひらがなに代表される独自の文化を創造するまで、二、三十年（人間の歴史で言えば二、三百年）かかっている。日本語を書き表すために、日本の言葉と中国の文字とを融合させた結果が、ひらがななのだ。漢字の訓読みも同様な日中融合だ。
一方、英語が日本に大量に入り始めたのは福澤諭吉のベストセラー「西洋事情」が出版された一八六〇年代のころだ。今からざっと十五年（実際は百五十年）前。中国の言語や文化を日本文化と融合させたときと同様、欧米の文化と日本文化を融合させるまでに二、三十年（実際は二、三百年）かかると考えれば、現在は過渡期だということになる。現代のカタカナ文化の流行は、昔で言えば、まだひらがなの前の万葉仮名くらいの段階に相当するんじゃなかろうか。
つまり、単にアメリカに一途な恋をするだけでなく、その意味を消化し、必要な部分を日本文化の一部として取り入れ、新しい日本の文化をつくる時代こそが、近未来なの

だ。

その兆しは、例えば、ポップカルチャーに見られる。マンガ、ゲーム、そしてファッションの一部は、日本発の文化として世界に受け入れられ始めている。これらはいずれも、西洋から輸入した文化を、日本風に創り直した結果だ。

日本は技術立国であるべきだ、という人がおられるが、技術は産業の基盤に過ぎない。もちろんそれも大事だが、その上で花開くものは、文化だ。歴史は常に、最初に技術、次に文化、という順序で発展する。文化で勝負できてはじめて、成熟した国家だ。

もちろん、アメリカに恋をする前の私は、文化で勝負できる成熟国家だった。庶民の文化だった浮世絵はフランスの印象派画家の間で絶賛されたし、漆器はジャパンと呼ばれて諸外国で珍重された。

これに対し、アメリカに恋していた戦後の数年間、私は独自の東洋的文化を隠蔽し、欧米流の文化へのあこがれを強めていた。しかし、音楽も映画もマンガもファッションも、日本発のいいものが増えつつある。これらは、西洋風でも東洋風でもない。まさに、日本風の、無自覚的融合の成果。新しい、日本文化の芽生えだ。

無限抱擁性

私は、確信している。これから、日本には、平安のような文化の時代が再びやって来る。わくわくするね。

それは、優しい女性的な時代になるだろう。軍拡競争や技術競争をしている勇ましい時代は男性的だが、文化の時代は女性的だからだ。平安時代は女性的、そのあとの鎌倉時代は男性的だったように。

いや、歴史は繰り返さないのではないか？　という反論もあるだろう。技術は進歩し、世界は進化していくので、古き中国文化を輸入したときと、最先端欧米文化を輸入した現在では事情が違う、と。

私は、そのような進歩至上主義的な反論こそが、アメリカ的というか、未成熟的だと思うよ。

めまぐるしい変化の時代といわれる現在も、部品や登場人物は違うけれども、昔と大差ないと思うんだ。大きな包括的枠組みは昔のまま。ただ、その中で行われる様々な事柄が入れ替わっているだけ。こう考えるのが、日本流というか、ある種の東洋流なのだと思うんだ。

中国文化を輸入したときも、西洋文化を輸入したときも、日本らしさが薄まっていかなかったのはなぜか？　思想が雑居していて、無自覚に色々な文化と融合してきたにもかかわらず、相変わらず日本が日本らしさを保ち続けている理由は何か？　いつも変わらない、大きな包括的枠組みとは何か。

これが次の、そして、最大の問いだ。

答えは、無限抱擁性。無限に抱擁し包容すること。

本来、日本の思想の中心は、諸行無常や無我・非我、無私・非私。

パラドキシカルなことに、「中心がないことが中心」だ。

私たちが構築したあらゆるものごとは、所詮、砂を水で固めたモニュメントのようなものだ。時がたつと、さらさらと流れ、確実に存在し続けるかのようだった「形」は、姿を消す。本質的な私などないし、私は私ではない。私というものを前面に出すべきではないし、出すべき私など本当はない。確固としたものなど何もない。すべては無であり、無常であり、ゼロだ。おごれる者も久しからず。ゆく川の流れは絶えずしてしかも元の水にあらず。歳歳年年、人同じからず。

これらが、日本思想の基本。諸行無常。無だ。

アメリカと対照的だ。

アメリカには、自由と民主主義という中心がある。東洋から見たら実は自由など空虚なのだが、それは置いておいて、アメリカは絶対に正しいと信じる中心を持っている。したがって、自分の中心的理念と相反する者は受け入れられない。正しいか、間違っているか。主観か、客観か。自分か、他者か。仲間か、敵か。二者択一だ。このような二項対立的な立場からスタートするとき、無限抱擁は不可能だ。自分の確固とした中心を守ることが重要で、それを脅かす者は、異物であり、悪だ。中心が明確だから、ぶれない。

これに対し、日本は中心がないから、何を受け入れることにも抵抗がない。中国文化も、西洋文化も。しかも、受け入れたものに染まらない。そもそも中心がないから、中心が移動する心配がないのだ。あらゆる価値は所詮、諸行無常だから、主観と客観、自己と他者、善と悪、味方と敵を分ける必要もない。だから、無限抱擁できる。ブラックホールのように何でも受け入れ、いくら受け入れても自分らしさを失う心配がない。それが、日本の特徴であり、強みなのだ。「ぶれない」という概念を超越している。そもそも中心がないから、「ぶれない」どころか、ぶれるもぶれないもない。これが、圧倒的なサステナビリティーの秘密なのだ。

日本はもっとアメリカのようなはっきりとした考えを持った国になるべきだ、という

人がいるが、ここは気をつけなければならない。個々の細かな判断の際には考えを明確化することも必要だが、俯瞰的で大局的な判断を行う際には、『「はっきりした考えを持たない」というはっきりとした立場』を（無意識的に）持っていることが日本の強みなのだから、この最後の砦を手放してはならないのだ。

日本の根本原理──変動期には弱いが、安定期には強い

サステナブル（持続可能）とは、長く変わらずに存続可能だということだ。外乱に対して強いことなので、ロバスト（頑強）であることがそのポイントだ。何か、予想外のことが起こっても、それに左右されずにいられる国家こそが、サステナブルでロバストな国家だ。

いや、日本は金融危機やエネルギー危機、食糧危機が起こるとすぐに影響を受けるのに対し、アメリカのほうがすかさず対処できるので、アメリカこそがサステナブルでロバストなのではないか。そうおっしゃる方もおられるだろう。

そのような方は、もっと長い時間スパンで問題を俯瞰して頂きたい。

迅速に対処するということは、短期的な問題解決を重視しているということだ。長いスパンの変化に対処するためには、ゆっくりと時間をかけて、長期的な変化を追っていかなければならないから、そもそもすかさず対処していてはいけない。

つまり、日本は様々な物事への対応が遅いと言われることがあるが、それは、短期的な変化への近視眼的な対応よりも、長期的な変化への大きな視点での対応を、行っているということなのだ。ただし、無自覚的に。

これは、私のような国家の視点——つまり、長い時間軸——で見ると明らかだが、人間が陥りがちな短い時間軸だと見えにくい、当たり前の原理だ。

若い国、アメリカに住む人たちは、即座にディシジョンをできる人間が賢い人間だ、と考える。これも、なんとまあ、短い時間軸での判断だろう、と前から気になっていたことだ。まだ二十三歳なんだから仕方ないんだが。生まれる前のことはわからないからね。若者は、敏速だが、近視眼的だ。

日本は最近衰退しつつあるとか、閉塞感だの、暗い世相だのという話が盛んだが、これも、長期的な視点を忘れている。

長期的な視点から見た日本の特徴は、サステナブルでロバストであること。これは、言い換えれば、「日本は変動期には弱いが、安定期には強い」ということだ。

「日本は変動期には弱いが、安定期には強い」という自明な特徴は、日本の近未来を占う際に、最も考慮すべき事柄のひとつだと思う。ところが、近視眼的な政治学者や経済学者からは聞いたことがない。気付いていないのか、重視していないのか。

高度成長期やバブルのころを思い出していただきたい。あのころはどんな時代だっただろうか？　科学技術にも金融システムにも爆発的なブレークスルーがなく、日本人の得意な細かい改良を重ねていくことが強みになる時代だった。

ところが、その後、コンピュータやインターネットのすさまじい発展や、目を覚ました中国・インドの発展、環境破壊の著しい進展、金融経済の破たんなど、大きな変化が次々に起こる時代がやってきた。まさに、長期的サステナビリティーには優れ、短期的な変化への対応が苦手な日本にとって、つらい時代だ。しかし、変化の時代は永遠には続かない。いつか変化は収束し、様々なきめ細かな改良が重要な、安定した時代が来る。必ず来る。そのときは日本の時代だ（もちろんその後にはまた変動期が来るのだが……）。

もっと昔を振り返ってみても同様だ。大航海や産業革命の時代は、戦略・戦術に長けたオランダやイギリスの時代だった。大きな変化がある時代は、論理的・合理的な西洋流が強い。逆に、変化の小さい時代は、論理や合理を超えた全体としての知恵を蓄積した東洋が強い。中でも、東洋の知恵や、西洋の科学技術や、元来のきめ細かさ、清潔さ、

真面目さ、誠実さをみんな無自覚的に雑居させている日本は、安定期には強い。

そして、変動期というのは、国家的視点から見ると、短期的な変化の時代に過ぎない。変動と変動の間の長く安定した時期こそ、国家にとって、長い繁栄を謳歌する時代なのだ。言うまでもなく、前者は男性的な時代、後者は女性的な時代だ。

そして、東洋は、なかでも、日本は、そのような時代を包み込むことができるように、「無限抱擁」という最強の戦略を身につけているのだ。

だから、全く心配しなくていい。ＩＴ革命や電気自動車革命や中国の発展といった短期的な変化が一巡し、一段落したら、また日本の強い時代が来るに決まっている。これは単なる楽観的予想ではなく、歴史の必然だ。これまでもそうだったし、日本の無限抱擁的特徴が変わっていない以上、これからもそうなる。

もちろん、日本が強いといっても、ＧＤＰが再び二位に返り咲くというような進歩至上主義的な意味ではない。ユニークな存在感を示すということだ。

日本のどんな分野が繁栄するか？　もちろん、環境問題への対策のような、日本の科学技術が生かせる分野がひとつだろう。もっと大きいのは、先ほども述べたとおり、文化だ。

つまり、漢字に代表される中国文化の輸入、ひらがなを代表とする日本文化の基盤構

築の次には、平安文化の開花があった。同じだ。英語に代表される欧米文化の輸入、和洋織り交ぜた新しい日本文化の基盤構築の次には、平成文化の開花があるはずだ。

日本人には二種類ある――静かに笑っているシャイな人と、静かに笑っている強い人

和洋折ませた後の新しい日本の文化とはどんなものか。
東洋的感性と、西洋的合理性を併せ持った新日本人像をイメージしてみていただくといい。
西洋から見ると、日本人はシャイだといわれる。にこにこわらっているばかりで、考えをはっきりと表明しないので、もっとはっきりと論理的に考えを述べられる国際人になるべきだ、といわれたりする。国際会議でもビジネススクールでも、日本人だけ、だまっていて、意見を言えないといわれる。情けない。
日本人には二種類ある。「静かに笑っている人」と、「静かに笑っている人」。
いや。三種類と言うべきか。「静かに笑っている人」と、「欧米的に口の立つ人」、そして、「静かに笑っている人」。

何が言いたいのかというと、シャイではっきりしないとか、子供のようだ、魚の群れのようだ、といわれる日本人が、最初の、単に静かに笑っているだけの日本人。

欧米的に口の立つ人というのは、欧米流を学び、欧米的になった日本人。

最後の日本人は、欧米流も東洋流もわかった上で、武士のように、あるいは、合気道、弓道、剣道、書道、華道、茶道、禅の達人のように、鎮まり返った心で微笑んでいられる日本人だ。

つまり、西洋流も東洋流も思想的に雑居させ、無自覚的に融合させ、すべてを抱擁した後の、新しい、しかもこれまで通りに日本人らしい、日本人像だ。

「静かに笑っている人」と「静かに笑っている人」というトリッキーな言い方をしたのは、シャイではっきりしない日本人と、あらゆることを身につけすべてをわかった上で静かにしている姿は似ているからだ。似ているが、全く違う。後者は、日本の良さを身につけているのみならず、欧米に対して、日本の文化の特徴や性質を西洋型論理で説明できるような在り方だ。このような姿こそ、東洋と西洋を包容した上での、未来の日本的日本人なのではないだろうか。

そして、そんな気骨のある未来型日本人はこれまでもたくさんいたんだよ。しかし、悲しいかな、西洋人や現代日本人には、一つ目と三つ目の区別がなかなか付かない。三

つ目の段階に達していない人が多いからね。目が肥えていない人には本物はわからない、ということだ。そのせいで、一見よく似ている「達観」と「シャイ」は、混同されがちだ。歯がゆいことだ。

それぞれの時代、それぞれの国、それぞれの今

気骨ある未来型日本人とは明治人のことではないか、と言われる方がおられるかもしれない。

現代人の一部には、明治に郷愁を感じる人々がおられる。天皇を中心とした強い日本を取り戻すべきだ、というような。しかも、そのような人は少なくないように見受けられる。日本で保守派というと、こんな、明治に戻りたいと考える人々のように見える。

しかし、長い日本の歴史の中で、明治はむしろ特殊な時代だ。そこに戻りたいという人がおられてもいいが、特にそこに戻りたい人がマジョリティーになる必要はない。というより、もしもそんな人々がマジョリティーになるとすると、それは偏っている。日本人にはもっと長期的視点の愛国心を持ってほしいと思う。

日本人の心は、感性豊かな平安時代や、禅の心を開花させた鎌倉時代、武士道や文化の栄えた江戸時代の良さに戻ってもいいはずだ。

これからの時代はそれらに似るはずだ。

ただ、どんな時代に似るかは、見方による。いわば、どうにでも見える。これが、無限抱擁というものだ。無限抱擁的な見方をすると、これから起こる何事も新しくないし、同時に新しい。これからの時代は、あらゆる過去の時代に似ているし、似ていない。私は既にあらゆることを経験しているし、まだほとんど何も経験していないとも言える。

ただ言えることは、私はこれまで、世界一サステナブルな国家であったし、これからもそうあるだろうということだ。

ひとつ、書き加えておこう。

私の話を、アンチ・アメリカ（あるいはアンチ西洋）だと思われては困る。

若いアメリカを小娘扱いしたが、これは批判ではない。実際に若いから若いと言っただけで、それではいけないということではない。誰にだって、正義感に満ち溢れた青年時代はあるものだ。つまり、まだ二十三歳のアメリカには、若さゆえの良さがあるのだ。

だから、日本の若者は、大いに若い国に学びに行くべきだと思う。

ただ、日本が若い国になろうとする必要はないし、なれない。老人は若者には戻れな

いんだ。それは、老いたからではなく、既に蓄積した思想があるから。
アメリカに限らず、欧米の国々に対して批判的だと思われたかもしれないが、それも違う。どの国も、みな、それぞれに個性的で素晴らしい。あらゆるものを無限に包容する「和の国」である私が批判など行うわけがないことは、考えてみていただけば、納得いただけるのではないだろうか。
私は、すべての国、すべての人々、そして全宇宙のすべての物事を愛している。すべての国、人、ものの発展と幸福を祈っている。

デジャブ

科学技術が高度に進歩した現代という時代。新しい製品、新しいトレンドが世の中を席巻する。時代の変化するスピードはめまぐるしく、手に入る情報の量はすさまじい。
インドから日本まで仏教が伝来するのに、かつては百年（実際は千年）もかかったのに、今では情報が瞬時に世界中を駆け巡る。こんな時代は、これまでにはなかったと感じられるかもしれない。

私自身も、あまりに多くの情報が入ってくるので、私の私らしさが失われ、世界がのっぺらぼうな均一化に向かうのではないかという心配もしないではない。

しかし、「衣食住を営み、集団をつくり、コミュニケーションにより情報を得て、考え、活動する」という人間の基本的な在り方は、全く変わっていない。ただ、便利で快適になっただけだ。若い人は、「現代だけが最先端の素晴らしい時代だ」と思いたいだろうが、それは、幻想なんだよ。

情報の量や、世界との距離は変わったけれども、国家や人間が行っていることの基本は、何も変わっていない。喜怒哀楽も、人生観も、思想も。太古の昔と何ら変わっていない。

だから、「思想的雑居性」「無自覚的融合性」「無限抱擁性」という私の特徴さえ失わずに生きていけば、私らしさはこれからも維持していけるに違いない。アメリカへの片思いから覚めた私には、はっきりとわかる。私は、変わらない。

アメリカもヨーロッパも中国もインドもドンと来い、だ。私はすべてを抱擁する。

そうはいっても、昔よりも情報量が圧倒的に多いことは確かだ。これからは、史上最も、世界からの様々な情報を無限抱擁できる時代。そう考えると、楽しみだね。

逆に、世界一サステナブルであり続けてきた私の思想的特徴を、近くなった世界に発

信する時代でもあると思う。若い国は自分のことばかり考えがちだが、私のように、近代西洋的二元論を超えて、皆の幸福を目指す考え方を、世界中に広めるべきだと思うからね。世界のために。こちらも、楽しみだね。

いずれにせよ、長い間生きてきた私にとって、あらゆることは、新しくもあり、同時に、過去の何かに必ず似ているともいえる。それを楽しみ続けることができるのは、私が『中心を持たないという「思想の中心」』を持っているからなのだ。ありがたいことだ。

そして、みなさんは、私。私は、みなさん。

年年歳歳、花相似たり。歳歳年年、人相似たり。

何度年を重ねても、花は、どれも似たようなものだ。そして、人も、同じようなものだ。

私は日本。デジャブのように、無限抱擁を繰り返していく。